

令和6年度 岐阜県現代陶芸美術館協議会 議事要旨

■ 日時:令和6年8月6日(火) 15時00分～16時15分

■ 場所:岐阜県現代陶芸美術館 プロジェクトルーム

■ 出席者:

- 【委員】安藤(工)会長、有賀委員、安藤(貴)委員、小野寺委員、長谷川委員、松原委員、箕浦委員、細野委員、小栗委員、吉本委員
(欠席:加藤委員、高木委員、安藤(雅)委員、田代委員)
- 【県】石崎館長、久野副館長兼総務部長、岡田学芸部長、蒲課長補佐(文化伝承課)、西岡係長、立花係長、澤田課長補佐三輪主任(文化伝承課)、林主任、松浦主事

議事1:令和5年度 事業報告について

(有賀委員) 以前入り口にあったオブジェは今どこにあるか。

(石崎館長) 桑田氏の作品については現在修理中です。

(有賀委員) 館長は、これで3年になると思うが、どんなことに注力をしてきたか、またその達成度はどうか。

(石崎館長) 当館は陶芸のみを取扱うため、事業展開が窮屈になってしまわないかという懸念がありましたが、東濃地区の陶芸に対する許容量にも助けられ、様々な展開ができていると思います。また、東濃地区は焼き物に対し、いわゆる玄人的な見方をされる方が多く、その点においても、焼き物のみでも、広がりを感じています。

多くの方に見ていただくためには、ポピュラーなものを求めないといけませんが、個人の作家、作家集団の存在も、皆様に知っていただきたいと考えており、そのバランスが重要であると考えています。

多くの人に足を運んでもらい、心を豊かにしていただければ、その願いは広がって行くのではないかと考えています。

議事2:令和6年度 事業計画について

(箕浦委員) 来年3月の鈴木藏の志野展について、当館のコレクションと巡回展との兼ね合い、国立工芸館との協力関係などについて、伺いたい。

(石崎館長) 鈴木藏の志野展については、国立工芸館から声をかけていただきました。金沢から始まり、多治見で終わるのが良いのではないかとということで、当館を巡回展の最後にしていただいています。鈴木藏先生の全貌というよりは、主に「志野」に焦点を当てた展覧会になっており、当館からも、作品貸出など協力させていただいているところです。

議事3:美術館の運営についての提言

(松原委員) 館長より、東濃地区は、玄人的な見方をする方が多いという、嬉しい言葉をいただいた。やはり現代陶芸美術館には、格式高い美術館としての役割を担ってほしい。収益の問題もあると思うが、できれば大衆迎合はしてほしくない。

西洋の陶芸について、北欧の展覧会が多いと感じる。中央から北の展覧会が多いが、南の方の作品を見る機会が少なく、手薄に感じる。

近年では、川喜田半泥子の展覧会に感銘を受けた。ああいったようなストーリー性を持った展覧会をぜひ企画してほしい。

(石崎館長) 大衆受けとは、また少し異なった現代の若者に向けたセンスを感じさせるのが北欧系の展覧会であると考えます。次回開催する荒川豊蔵展については、人柄や、土着性といったものに深く入り込んだ展覧会になる予定です。

(小野寺委員) 陶磁器は立体造形物であると思うが、展示物の後ろや、底など、作品を全方位から見る方法、取組はあるか。

(石崎館長) 借り受けた作品など、全方位からの鑑賞が難しいものもありますが、代表的な作品については、HP上で、3D画像の公開をしています。また展覧会によりますが、基本的に作品の後ろも見ていただ

きたい作品は独立ケースにいれたり、鏡を設置したりすることで、後ろからも作品を鑑賞できるようにしています。

(安藤委員) ここ 5 年間は頻繁に足を運ばせていただいたが、美濃の陶器だけでなく、日本だけにとどまらない多国籍な作品を見ることで、その国の生活のあり方や、文化、デザイン性などを感じることができ、とても参考になった。そういった展覧会と格式高い伝統的な陶器の展覧会の、両方を併せ持った方向で進めていただきたい。

現在開催中のリサ・ラーソン展は、一步会場に入り、最初の作品を目にただけで、頬が緩み笑顔になるような展示だった。美術鑑賞という観点だけではなく、リラックスして楽しむことができる美術館という視点も重要ではないか。

(長谷川委員) 協議会に参加させていただき、全国各地の美術館を訪れる機会が増えた。美術品と美術館の違いや、美術館によって同じ作品でも展示の仕方が異なるということに気づき、やはり、美術館にまず来館してもらうことが重要であると感じた。そういう点では、こどもむかデーなどの取組には非常に賛成できる。アウトリーチよりも今の社会形態にあっているのではないか。

(箕浦委員) 昨年の大地のこどもたち展で、学校で取材をさせていただいたが、次世代の子供たちと、美術館がかかわりあいながら何かを創り上げる取り組みが続いているのは素晴らしいことだと思う。教育普及が美術館運営にしっかり入り込んでいるのが岐阜県の美術館の良いところだと思っている。若いころの経験が、後々の成長に影響することもある。公的な美術館の役割として頑張っていただきたい。

(細野委員) 国際陶磁器フェスティバル美濃の事務局長としての立場から提言させてもらうが、グランプリの金賞作品については、現代陶芸美術館に収蔵されることになっている。現在も積極的に展示等して頂いているところであるが、改めて、常日頃から、来館者の目につくようなかたちで、金賞作品を展示し、定期的な入替を行っていただきたい。

(小栗委員) 展示ケースのLED化の早期実現を目指していただきたい。貴

重な美術作品をより多くの方に、よりよく鑑賞していただくためにも、対応は不可欠であるように思う。また、これから先も作品収集は続いていくと思われるため、作品の収蔵場所の確保も必要ではないか。最後に、教育普及活動において、SNSでの広報を積極的に活用していただきたい。協議会委員として、投稿に対する「いいね」など情報の拡散にも協力していくつもりである。

(吉本委員) 今後も、小中学校への鑑賞会や出張授業など美術館を身近に感じられるような教育普及活動を続けていただきたい。

(有賀委員) 観覧者数について、現状、平成30年の69,852人が年間の最大来館者数となっているが、大体7万人程度が現代陶芸美術館の最大の来館者数とみてよいか。

(石崎館長) 交通の便がよくないこともあり、入館者は現状の数にとどまっています。ポピュラーな展覧会を続けたり、一つの展覧会に大きな予算を使ったりすることができれば、広報を含め大勢の人が入るような仕組みを作ることができますが、先に松原委員がおっしゃったような、低い方に流されない展覧会を行っていく中で、子供たちにも入館していただき、長い目で、見る人、作る人、この地域に生きることを考えていただける人を創っていくことが理想です。

(有賀委員) 現代陶芸美術館の入館者は、岐阜県美術館や、岐阜県博物館よりも少ない。同じ岐阜県の美術館、博物館と考えれば、交通の便の問題もあるが、入館者はもっと増えてしかるべきではないか。地元のバス会社等の協力も検討していただきたい。

(安藤会長) 皆さんからいただいた意見は、今後の美術館運営に活かしていきたいと思います。これで議事を終了します。ありがとうございました。